

本田財団レポート No.8

ヨーロッパから見た日本

NHK解説委員室主幹 山室英男

このレポートは昭和54年1月から3月にかけて行なわれた講演の  
要旨をまとめたものです。

## はじめに

### ●日本はヨーロッパを理解しているだろうか。

今日は国際理解について、お話ししようと思います。ヨーロッパと日本の関係をお考えになればお判りの様に、この百年位の間、すなわち明治維新以後、日本は主にヨーロッパを手本として学んでまいりました。憲法も軍隊もそうです。ですから私達はヨーロッパの事をかなり知っている様に思いがちですが、5年半の間ヨーロッパにいた私もなかなか判りにくいのです。ヨーロッパの内部はバラバラですし、又流動的なのです。



例えば、私達はEC（ヨーロッパ共同体）というものでヨーロッパが1つであると思いがちですが、実はバラバラのヨーロッパをこれ以上バラバラにしない為にECというものがあるのです。第二次大戦後ようやく国と国との協力が進み対話ができ、コンコルドやエアバスの開発のような共同作業ができるようになったのであり、第二次大戦前は血なまぐさい戦いの歴史であったのです。第三次世界大戦をヨーロッパでおこさないようにしようという願いからECができ、そこから対話が生まれる様になり、安定してきたのです。

又ヨーロッパは非常に流動的で、ヨーロッパの話をするときは、いつ、どこでの話だということを決めてかからないと判らないのです。「ヨーロッパでは……」という表現は危険です。現実にはヨーロッパはどんどん変わっており、ヨーロッパにはもはや、カント、パスカル、デカルトのように世界をリードする思想家は出まいという気がしますし、彼ら自身、どうやら自信を失いつつあります。アジアに、その中でも日本、中国、インドあたりに何かいい知恵はないものかという不安な時代にはいつているのです。

従って我々は彼らを十分に理解できないのではないかと、又彼らも我々を理解することができないのではないかと、ということがまずヨーロッパの話をするときの前提になるだろうと思います。

## コミュニケーション

### ●コミュニケーションの意味

そこでまずコミュニケーションについて話をしたいと思いますが、その前にコミュニケーションという単語を考えてみたいと思います。

コミュニケーションという言葉は日本語にありませんでしたし、又日本語に訳しにくい単語です。というのは、これは東洋になかった思想だからです。この言葉に関係し、又類する単語にデータとかインフォメーションというの

があります。データとは数値的、無機的なもので、このデータに人間の意志、評価、判断が入ってくると、インフォメーション（情報）になるわけです。従って、データの国際間の交換は比較的容易にできるわけですが、このデータに例えばヨーロッパなり日本なりの独特な解釈を加えてのインフォメーションの交換は難しくなるわけです。

コミュニケーションは普通対話とか交流とかに訳され、「日本とヨーロッパはお互いコミュニケーションが成り立つか」などと使われていますが、先程のインフォメーションの交換がコミュニケーションとなるわけで、私は先に述べましたように異文化間のコミュニケーションについては悲観的な見方をもっています。

さてコミュニケーションという単語をOED (Oxford English Dictionary) で調べましたところ、1450年頃から「知識の交流」という意味で使われています。ところが実際にはそれより一千年以上も前に「聖体拝受」、即ち「人間の罪を抱いて死んでいったキリストと一体感をもつこと」の意味で使われているのです。従って本来の意味は、communicate with—即ち他の誰かと何かを共有するということなのです。ですから excommunication は破門という意味になるのです。

## ●異文化間にコミュニケーションは成り立つか

そこで本題のコミュニケーションですが、私は先程から異文化間のコミュニケーションは難しいと述べていますが、昨年帰国直前に見聞したことから、いまはある条件がととのえばそれが出来るかもしれないと考えるようになりました。それは昨年9月末、私がパリをたつ直前、0～6才の国際的な幼児の収容施設の園長から寄附の申し込みを受けたときでした。

どういうことかと聞いてみると、「来年は国際児童年にあたり施設で預っている子供達を主役にして文化映画をつくりたい。内容的には0才から6才までの子供達がどういうふうに対話をし、言葉を身につけていくかということ記録映画にとって世界に発表したい。ついてはその資金を寄付してくれないか。」という申し出なのです。更に詳しく聞いてみると、言葉の不自由ないろいろな国の子供達を4～5人ずつのグループに分け、園長が黒板にボール紙の箱の作り方を書いて、それと同じものを作りなさいというと、子供たちはその黒板の絵を見ながら、見ぶり手ぶりを交えて相談しながら作りあげてゆくわけです。子供達はこの色はどうだとかこうだとか、お互いに勝手な色のクレヨンを持ってこれにしようか、あれにしようか、などとやりながらなんとなく合意して一つのボール箱をつくるのです。つくっていくのを見て、この園長はこれこそがコミュニケーションだとある悟りのようなものを得たという話なのです。

考えてみますと A300 エアバスの製造にも、この事が言えるのではないかと思います。エアバスは胴体が西ドイツ、主翼をイギリス、尾翼をスペイン、

内装をベルギー、組立をフランスと各国が共同して造っているのです。

ヨーロッパ域内の国々は、今日なおかつコミュニケーションをしようと努力を積み重ねているのです。コミュニケーションというのはただ対話するとか、情報を交換するというだけでなく、先に言葉の意味で述べたように「共有する」ことなのです。つまり労働を共有する経験を積み重ねていく事によって初めて、彼らはコミュニケーションを持ち、お互いに理解し合っているのです。

日本について考えてみますと、我が国は明治維新以後、外国と情報を交換したり、視察に行ったり、国際会議に出席したりしていますが、一つのを完成させる為に、共に手を出し、共に汗を流し合った経験が乏しいのです。我々が百年の間ヨーロッパに学び追いつこうと努力したのに、まだ理解できたと言えないのは、我々が彼らと共に一つのを完成させる為に汗を流し合った事が少ないからです。例えば、ホンダ・フランスでは少数の日本人が多くのフランス人と共に汗を流し苦楽を共にしながら、自動車やオートバイを売る努力をし続けています。そこではきっと、日本人とフランス人の間にコミュニケーションが成り立っていると思うのです。このような「経験をくり返し重ねていく」ことによって、異文化間のコミュニケーションがはじめて可能になるのではないのでしょうか。

## 日本との相似点・相異点

### ●相似点

#### ——ナショナルなもの——

次に、我々と外国人（ヨーロッパ人）との考え方の似ている点、異っている点をお話しします。一つは「相手もそれぞれの国の国民、我々も日本国の国民」と考える共通なものの考え方。もう一つは主として感じ方の違いを認識する問題です。

まず共通なものの考え方はナショナルということです。ナショナルというのは、各々の国や民族を成り立たせている本質的な性質です。そういうナショナルなものがあるのだという事を、我々は先ず第1に認識しなければなりません。そしてこれは我々に共通なものだと考えるべきです。例えば、フランス人はフランス愛国者であり、日本人は日本の愛国者であるという考えで、お互いに理解し、尊敬する事ができるのです。日本のことを悪く言う日本人をヨーロッパ人は気どり屋と見なし、本当の話をしようとは思わないでしょう。

ドイツ・ナショナルやフランス・ナショナルを理解しながら、日本・ナショナルを再確認し、自覚しなおしてぶつかり合うということが、ヨーロッパと日本を考える場合に重要であり、そういうナショナルなものを手だてにして我々は理解し合えるだろうと考えます。

イランでは先日クーデターがおきました。イランは今バザルガン内閣で

すが、クーデターの前までは1925年レザー・シャーがクーデターで作り、53年間続いた王朝でした。この王朝はイラン・ナショナルに根ざしたものでなく、虚な体制であり虚な歴史だったと私は考えます。イラン・ナショナルを考える際にはどうしても、イスラム教シーア派を抜いては考えられません。ところが王はそれに挑戦したのです。ホメイニというお坊さんが、15年間追放されていた事実だけ見ましても判るかと思います。シャバクという秘密警察は反王朝派の政治家、学者、ジャーナリストを捕えては、ほら穴に閉じ込めたりしたのです。そういうシャーのやり方に一見無力であるかに見えたイスラム教徒としてのイラン国民は、とうとう去年の9月暴動をおこしたのです。イラン・ナショナルを国王が無視した結果なのです。ナショナルなものをその様に考えて頂きたい。

戦前36年間にわたって日本は朝鮮民族を支配し続けましたが、それも虚な体制だったのです。そして日本の敗戦によって韓国・ナショナルは独立を得ました。

そういう「ナショナルなもの」は全ての国にあるのです。そういうものを基礎にしてお付き合いしようじゃないか、それが何であるかをお互いに理解する事によって、初めて国際理解ができるのだという考え方が、いまアメリカやヨーロッパにでてきているように思うのです。

インターナショナルというのは「ナショナルなもの」の付合いです。個性的で私の強いナショナルの付合いなのです。簡単に握手できるものでもとないのです。そういう国際関係を理解して下さい。

#### ——国家及び国益——

国家というものは三つの要素から成り立っています。先ず「統治権力」です。国民を統治しかつ代表する事のできる権力です。そして第2に「国民」と第3に「領土」です。この三つが揃って初めて国家になります。従って、 $国家 = 権力 + 国民 + 領土$  という加算式が成り立ちます。

ヨーロッパでは放浪するユダヤ人とかジプシーを眼の前にしてきたので、このような加算式が根を下している様に思うのです。日本では「国」と「政府」の違いさえはっきり認識されていませんが、ヨーロッパではその区別がはっきりとつけられています。それは陸続きに国境を接し、互いに国家の興亡を繰り返してきた歴史にもよるのでしょう。「国家とは何か」を痛い程自覚しているように思えるのです。

日本人とヨーロッパ人の国家意識は大変違います。日本は島国で日本人という単一国語の単一民族が住んでいるためか、特に戦後の国家意識は大変薄くなっています。これから外国と付合っていく時には、こういう事をきちんとしておかねばなりません。

それではナショナル・インタレスト（国益）とは一体何でしょうか。三つの内容があると思います。国の「独立」ということがその最大の価値です。異民族に支配されていないという事が国益の第一です。ベトナムと中国とカ

ンボジアなどの戦いも、お互いに独立が侵されたと言って始ったのです。社会主義陣営は平和の陣営で、資本主義陣営は戦争の陣営だなどという“神話”は崩れました。今日の国際情勢を観るのに大切な事はナショナルなものを突き詰めていくという事です。ベトナムや中国やカンボジアのナショナルなものを突き詰めていけば、インドシナ情勢はもっと判り易くなります。第2に大切な価値は「平和」です。独立していても戦争をつづけていたのでは国民は参ってしまうでしょう。国の建設も出来ません。そして第3に大切なことが「繁栄」なのです。国民は皆、豊かに生きたいと考えています。従って、  
国益＝独立＞平和＞繁栄　という不等式が成り立ちます。

こういう考え方をきちんと整理して頭に入れておく事と平行して、我々にとってナショナルなものとは一体何かを自覚して、初めて国際関係を理解することができるのです。以上が国際関係の原論であり、各国の相似点です。

## ●相違点

### ——経験と思想——

さて、今度は相違点を考えてみましょう。私にとって最も印象の深かった具体例でお話ししますと、テロリストに対する日本と西ドイツの対応の仕方の相違です。

当時私はフランスにおりまして、スタッフと共に西ドイツに行き、事件を取材してテレビ番組を放送したこともありました。事件後、日本から来る新聞などを見ていると「ドイツのやり方はゲルマン民族の血の冷たさにある」とか、「最近西ドイツにまた芽ばえてきたといわれるナチ的な勢力と関係があるのではないか」などと書いてあり、日本人は西ドイツのやり方を理解しようとしていないのではないかと思いました。

1977年9月5日におこったシュライヤー氏誘拐事件や、それ以前に相次いだ要人殺害事件は、実は1975年春にテロリストの要求に屈して釈放した5人のテロリストの仲間たちの犯行だったのです。シュライヤー氏を誘拐したテロリストの要求をのんで、彼らの仲間11人を釈放すれば、また新たなテロが起こると考える。この考え方が「経験と思想」という問題なのですが、いわゆる経験主義と言われるヨーロッパの思想は、またテロリストを釈放すれば、あらたなテロが起きるに違いないとか、9分9厘起きるといふ風には考えない。テロリストの釈放は確実に、100パーセント、イコール新しいテロ事件、殺人事件と考える。これが経験が思想になったということなんです。ひょっとしたらやらないかもしれない、という発想は絶対がない。この辺がヨーロッパの発想と我々とちょっと違うところかもしれません。いや大変違うところかもしれません。つまり、我々日本人は9分9厘やるかも知れないが、しかし1パーセントはやらないかもしれないという、楽観主義的な部分があるから、日本航空ハイジャックの犯人の要求を聞き入れたのです。「テロリストの釈放イコール新しい殺人事件」と考えるかどうかには基本的な思想の違いがあるのです。

先年亡くなられた哲学者の森有正氏の書いた「経験と思想」という本によりますと、体験と経験を区別し、「人間は体験に先行し、経験は人間に先行する。」とされています。経験は直ちに思想になり、人間を作ってゆくのです。多くの体験の中から経験と呼ばれる真実を自分のものにした時に、それは思想になるのです。

11人のテロリストを釈放すれば、100パーセント新しい殺人が行なわれるという思想があった為、西ドイツ政府は犯人たちの要求を蹴ったのです。その後起こったルフトハンザ機の乗っ取りに際して、人質がシュライヤー氏一人であっても乗員・乗客86人であっても、思想になったものは変る訳がありませんでした。西ドイツ政府は断固たる措置をとったのです。15秒以内にハイジャックの3人の犯人を倒し、乗員・乗客を全員無事救出する為、G S G ナインと呼ばれる部隊が徹底した訓練を行い、成功したのです。1977年10月16日の救出成功の時、アメリカのカーター大統領やフランスのジスカル・デスタン大統領、東ドイツの大統領からも夜中にもかかわらず、祝福の電話や電報が届いたとの事です。

ヨーロッパに生まれた個人主義、合理主義、経験主義などの思想を含めて、本当にヨーロッパの事が分っているかどうかとなると、こういう事件に接してみて自信がゆらぐのです。日本はテロリストの要求通り 600万ドルの現金を渡し、6人のテロリストの仲間を釈放したのです。今度同じ事がおきた時に、日本はどうするのでしょうか。

西側陣営の自由と民主主義を守るという一つの共同作業の中で、日本は脱落してしまうのではないのでしょうか。今年初めの西太西洋のグアドループ島での4カ国首脳会議に日本は招かれませんでした。テロリストに対する対応の仕方を見ていると、日本が招かれなかったのは当り前のように思えるのです。

我々が国際関係の中で生きていく場合において「我々とは何か、我々のアイデンティティ、日本・ナショナルとは何か」を考えて頂きたいのです。国際関係を考えるという事は、まず自分を、日本を考えることから始まるのです。国際化時代は日本人である事を見直すことから始まるのであり、くり返しますが、インターナショナルというのはナショナル同士の付き合いなのです。

## 感性

さて最後にヨーロッパの「感性」の話をしてみたいと思います。

最近、日本でも「感性」という言葉が流行しだしているようですが、感性というのは人間として持っている性能の一つです。何がきたないか、何が美しいか、何がはしたないことか、何が優雅なことかを判断する力を感性と呼んでもよいでしょう。

感性というと、人はすぐ情念とか、感情とか、あるいは欲望とかに結びつけて考えがちなのですが、例えばフランス語ではひとことでサンスと呼ばれる



ものを、豊かに、やわらかに、しなやかに身につけておかなければ、人間としてまず知性的ではないという話をしたいのです。

## ●感情

人間は理性的でなければいけないと言われてきました。そして理性的なものに対立するものとして感情的という言い方をします。人間は感情的になってはいけないと言われます。何故いけないかというと、感情的に行動すると失敗するのです。どういう失敗かというと、大体仲間が相手にしなくなって孤立するということです。つまり自分が一人きりで生きていけて、他人に迷惑を及ぼさないのであれば感情的に生きていってもいい。しかし一人二人が感情に生きると全体としてのチームを乱すし、自分が孤立してやっていけなくなるから、感情的に行動してはいけないということなのです。しかし感情的という言葉は理性的に対比する言葉ではないのです。どんな哲学書を開いてもハッキリしていることは、人間は本来理性と感情を備えており、それに悟性を加えたりします。そして感性の中の一部分が感情であります。

感性の中にはパッション（情熱）とエモーション（情緒）とセンチメント（感情）の三つがあるそうですが、我々はこの感性の中の一部分だけ大きく捕えがちです。私は感性という言葉でこの三つを全部ひっくるめていうんですけれども、理性的であるということは、必ずしも知性的であることにはならないと、いうのが私のヨーロッパ生活で感じたことです。

ヨーロッパの中でもフランス、イタリア、スペインなどのラテン系の人間というのは画家にしても文士にしても、多くの芸術家が出ており、非常に豊かな人間性を持っている人が多く見うけられます。これは何だろうかと考えてみると、彼らはやはり感性というものを大事にしてきたように思えるのです。

## ●知性

理性プラス感性、理性と非常にバランスのとれた豊かな、やわらかい、しなやかな感性というものを持っている状態を、あの人間は知性的だといえると思うのです。理性的であることは、必ずしもイコール知性的ではないのです。

理性+感性=知性　　だということが算術として成り立つのではないのでしょうか。理性というのは、フランス人に言わせると損得勘定をする性能だということです。つまり感情的な行動をしないようにチェックする機能であり、その人間が社会で生きるに当って損得勘定する性能だということです。従って理性的という生き方は確かに大事なことではあるが、それが全てではないと思うのです。

勇気と人間らしいやさしさを身につけ、あるいは美醜を判断することができるようなそういう人間は、やはり感性というものを大事にしているのだろうと思うのです。

## ●感性を豊かにするには

では感性というものは、どういうふうにしたら豊かにできるのか。確かなことは云えませんがヨーロッパの歴史の中に探してみますと、手がかりになるのはやはりルネッサンスだと思います。私たちも日本の古典の中に豊かな感性を見つけることが出来ます。たとえば、これは近世ですが「芭蕉」の“古池やかわずとびこむ水の音”などという句があります。「とびこむ」などという表現は俳句らしくなくて「芭蕉」の句の中でも最悪作だと評する人もいますが、あれにくらべると山寺で詠んだ“岩にしみいるセミの声”はすごい感性を感じさせる句だと思います。こういう豊かな感性を歌いあげた歴史を日本人は持っています。

俳句に限らず他にもいろんなものがありますが、ああいうものをもう少し取り戻すこと。或いは取り戻そうと思いついた時に、すでにある種の感性の豊かさが芽生えてきていると思うのです。あれはいい句だなあと思うことだっていると思うのです。

哲学者の中村雄二郎氏は、「感性とは人間のうちなる自然だ。」と言っています。現在、科学技術の発達によって、或いはそのコントロールの手違いによっていろいろな公害問題が起きています。この公害問題も実は人間の感性の問題ではないでしょうか。従ってこの感性は科学技術の発達と共にいよいよ豊かに共存していかなければならないと考えます。

二、三ヨーロッパで感じたことをお話しました。ご参考になれば幸いです。

### 講師略歴

昭和4年9月 東京生れ  
昭和25年6月 NHK入社  
昭和37年6月 " 報道局政治部副部長  
昭和41年11月 " (韓国) ソウル支局長  
昭和42年9月 " (スイス) ジュネーブ支局長  
昭和45年1月 " 解説委員  
昭和50年6月 " ヨーロッパ総局長 (在パリ)  
昭和53年10月 " 解説委員室主幹 現在に至る

## 本田財団レポート

- |       |  |        |
|-------|--|--------|
| No. 1 | 「ディスカバリーズ国際シンポジウム ローマ1977」の報告<br>電気通信大学教授 合田周平 | 昭53.5  |
| No. 2 | 異文化間のコミュニケーションの問題をめぐって<br>東京大学教授 公文俊平          | 昭53.6  |
| No. 3 | 生産の時代から交流の時代へ<br>東京大学教授 木村尚三郎                  | 昭53.8  |
| No. 4 | 語り言葉としての日本語<br>劇団四季主宰 浅利慶太                     | 昭53.10 |
| No. 5 | コミュニケーション技術の未来<br>電気通信科学財団理事長 白根禮吉             | 昭54.3  |
| No. 6 | 「ディスカバリーズ国際シンポジウム パリ1978」の報告<br>電気通信大学教授 合田周平  | 昭54.4  |
| No. 7 | 科学は進歩するのか変化するのか<br>東京大学助教授 村上陽一郎               | 昭54.4  |
| No. 8 | ヨーロッパから見た日本<br>NHK解説委員室主幹 山室英男                 | 昭54.5  |